

## 現代言語学の考え方(1) －日本語の語順について\*

西 泉

### 0. はじめに

本論が扱う現代言語学とは、1950年代なかばに、ノーム・チョムスキーによって生みだされた生成文法のことである。社会言語学などのように、言語と社会の接点に焦点を据えるのではなく、言語それ自体の研究をする場合、生成文法の影響を受けずに生産的研究を続けている学派は、現在ほとんどない。特に、本論で議論する内容は、ここ数年の生成文法理論の発展の中で発見された幾つかの言語事実を扱う。<sup>(1)</sup>

日本における、言語学専門分野以外での現代言語学の受容は、その内容や目指している方向が正確に理解されていないため、多くの誤解を生じたり、誤解に基づく的はずれな反発を招いたりしている。<sup>(2)</sup> 本論がそのような誤解を解く一助になれば幸いである。

本論の構成は、1で、生成文法の目標と方法論を簡単に述べ、2では、実際に1の具体的研究例として、日本語の語順の問題に考察を加える。3では、本論全体のまとめと、2の分析の不充分さを指摘し、新たな分析の方向を示唆する。

### 1. 現代言語学の目標とその方法論

生成文法の研究目標は、我々人間の脳内(mind／brain)に存在すると思われる、言語に関する「知識」を解明することである。この場合の「知識」とは、書物やメディアから、また、伝聞から得た情報という意味の、普通の意味での知識ではない。例えば、我々の日本語に関する「知識」は、

(1) イギリス人が3人ビールを買った。

(2) イギリス人がビールを2本買った。

- (3) ビールをイギリス人が2本買った。
- (4) ビールをイギリス人が3人買った。
- (5) イギリス人がビールを3人買った。

という一連の文(1)－(5)を読むと、即座に、(5)の文だけ、著しく日本語の文としておかしいと判断することができる。これらの文を、眺めていても、なぜ(5)の文だけおかしいのか、すぐに理由を述べることはできないであろう。(1)－(5)の文を観察してみると、ビールの数をかぞえる数量詞は、「本」であり、その数量詞「2本」が「ビール」のすぐ右隣りに来る(2)が、日本語の文として成り立つのは、直観的にも納得できる。さらに、(3)の文では、この数量詞「2本」が、この数量詞では修飾できない「イギリス人」を飛び越えて、「ビール」と結びつき日本語として十分に認められる文になっている。次に、類推で、これと同じようなことが、「イギリス人」をかぞえる数量詞「人」に起きているかどうか調べてみる。「イギリス人」のすぐ右隣りにその数量詞「3人」が来ている(1)と(4)の文は、数量詞「本」の場合と同じように、日本語の文として問題ない。では、数量詞「本」が「イギリス人」を飛び越えて「ビール」を修飾している(3)と同じようなことが数量詞「人」にも可能なかどうか実験してみたのが(5)の文である。(5)では、「イギリス人」をかぞえる数量詞「3人」が「ビール」を飛び越えて、「イギリス人」と結びつくことができるか調べたものである。その結果は、日本語の文として不適格であった。このことからだけでも、我々の脳内にある、日本語の「知識」は、類推などという単純な仕組みから成り立っているのではなく、かなり複雑な計算システムを有するものであることが予測される。今、ここで計算システムという言い方をしたが、言語に関する「知識」は、一つの認知のシステムと考えられる。例えば、(5)の文を見せられると、このシステムが脳内で計算し、ただちに、(5)は日本語の文ではないと認知することになる。この計算システム＝言語に関する脳内の認知機構を現代言語学では「文法」と呼ぶ。そこで、言語学者の仕事とは、例えば、(1)－(4)の文を正当な日本語の文であり、(5)は、日本語の文としては、おかしいということを、明晰に述べられるシステムを提示することである。以下、用語の統一のため、(1)

-(4)のような文を文法的文、(5)のような文を非文法的文と呼び、非文法的文は、(5')のように アステリスクを文頭に付与して表すこととする。

(5') \*イギリス人がビールを3人買った。

「文法」というタームは、生成文法において、脳内に存在すると考えられる言語に関する「知識」それ自体を指す場合と、言語学者が提示したそのモデルを指す場合がある。「文法」という語は、この意味で、二義的である。

生成文法の方法論は、物理学や化学などの他の経験科学の方法論と同じものである。実際、アメリカ合衆国東海岸では、形式化の課程で数学を多用する物理学の代わりに、経験科学の科目として高校レベルで言語学を教えようという計画が、MITの言語学者などを中心に、進められようとしている。さて、生成文法の方法論では、まず、我々の脳内に存在する「言語知識」を有効に示していると思われるデータを説明する仮説を考える。もし、その仮説が、このデータのみならず、これとは独立の、新たなデータの集合を同時に説明できるとしたら、その仮説はより一般的な仮説と考えられ、「言語知識」=「文法」という脳内の実在をより適格にモデル化した仮説と言える。しかし、これとは逆に、その仮説を反証するデータが多数存在するなら、当然、その仮説は、誤った仮説として放棄される。現実の言語学研究とは、このように、「言語知識」という実在に近づくため、より妥当で一般性の高い仮説を探す作業であると考えられる。もし、Aという仮説とBという仮説が全く同じデータの集合を説明できるとしたら、この2つの仮説の中でより少ない装置を使う仮説の方が、より一般性の高い優秀な仮説と見なされる。さらに、AとB、2つの仮説の中で、Aの方がBの方より広い範囲のデータを説明できるとしたら、Aの仮説の方がBの仮説より、より一般性の高い仮説と見なされる<sup>(6)</sup>。このような考え方は、経験科学の領域では、なんら例外的なものではない。理論を一つの大きな仮説と見れば、ニュートン力学から相対性理論、素粒子論に連ながる物理学の発展は、新たな物理的世界を説明する仮説が古い仮説と置き換わっていく過程と捉えることができる。一方、生物学では、メンデルの法則が分子生物学のレベルで遺伝子の本

体がDNAであると確認され、その基本的正しさが示され、彼の仮説がより強く支持されるということが起こった。将来的には、似たようなことが言語学の方でも起こるかもしれない。即ち、現代言語学の目標は、人間という生物の脳に内在する文法のモデルをつくるわけであるから、その結果が、大脳生理学の発展とともに、そのレベルから支持されることがあり得る。もちろん、言語学者がつくった「言語知識」に対するモデルは仮説に過ぎないのであるから、大脳生理学の側で、その仮説に対応するものが発見できず、言語学の側から提出した仮説が大脳生理学のレベルで反証される可能性も充分あり得る。だからと言って、大脳生理学が凡ての解決を与えてくれるわけだから、言語学の側では何をしてしても無駄だということでは、全くない。なぜなら、たとえ、大脳生理学が、将来、現在より格段の進歩をとげたとしても、言語学の側からのモデルが存在しなければ、言語に関して大脳のレベルで何を検証すべきか判らないであろう。<sup>(6)</sup>

## 2. 日本語の語順を考える

### 2.1 数量詞との関係

日本語という言語は、従来、語順が自由な言語だと思われてきた。例えば、(6)から意味を変えずに、名詞句(名詞+助詞)を自由に置き換えると、次の6通りの文が可能となる。

- (6) 太郎が花子にアンクレットをあげた。
- (7) 太郎がアンクレットを花子にあげた。
- (8) 花子に太郎がアンクレットをあげた。
- (9) 花子にアンクレットを太郎があげた。
- (10) アンクレットを太郎が花子にあげた。
- (11) アンクレットを花子に太郎があげた。

(6)-(11)の文からわかるように、日本語は、動詞(ここでは「あげた」)が文末の位置に来るということさえ守れば、名詞句間の語順は全く自由に見える。し<sup>(7)</sup>

かし、はたしてそうなのであろうか。このセクションでは、表面的には、全く自由な語順を持つように思える日本語に対し、あるレベルでは、実は、日本語は、固定された語順を持つ言語であるという仮説を提出する。この仮説を仮説Aと名づける。<sup>(8)</sup>

# 仮説 A

原則：日本語の文は、基底（深層）のレベルでは、語順が以下のよう  
に定まっている。

\_\_\_\_\_が\_\_\_\_\_を\_\_\_\_\_  
主語（S） 数量詞\*(Q) 目的語（O） 数量詞\*(Q) 動詞（V）

\* 数量詞は、随意的（Optional）に現われる。

規則1：目的語（「を」でマークされる名詞）は、先行する名詞句を  
飛び越えて前方へ移動する。これに対し主語（「が」でマ  
ークされる名詞）は、全く動かない。<sup>(9)</sup>

規則2：「自分」は、基底のレベルで、その先行詞（「自分」の指す  
人）が前方の主語であると決定され、両者に同一の指標  
（index）が付与される。

この仮説Aは、1つの原則と2つの規則から成る。さらに、この仮説は、文には、表層のレベルと基底のレベルという2つの異った表示のレベルが存在していて、基底のレベルから表層のレベルを関係づける＝派生するのが規則であると暗黙に仮定している。仮説の内容をこのように制約しているものが、実は、言語理論なのだが、この点は、深く立ち入らない。興味を持つ読者は、Chomsky（1986）などを参照して欲しい。また、この仮説Aのままでは、(6)－(11)の文に現われる、助詞「に」でマークされる名詞句については、何も言及していない。これは、議論を簡単にするため、「が」、「を」以外の助詞にマークされる名詞句は、取り扱わないことにしたからである。

仮説Aの原則では、数量詞は、それが修飾する名詞句の右隣りに随意的に現

れる。ということは、1の例文(1)–(5)に使用した動詞、名詞句、数量詞の語彙だけを使うと、基底のレベルでは、仮説Aの原則によって、次の(12)–(15)の文のみが許されることになる。

- (12) イギリス人がビールを買った。
- (13) イギリス人が3人ビールを買った。
- (14) イギリス人がビールを2本買った。
- (15) イギリス人が3人ビールを2本買った。

(12)は、数量詞が全く現れない場合であり、(15)は、凡て現れている場合である。(13)、(14)では、おのおの一つずつ現れている。これは、数量詞の出現が随機的であると、このモデルで規定した結果である。さて、この仮説Aが、1で述べたデータ(1)–(5)の文法性をどのように説明するのだろうか。(1)–(5)をそれぞれ(16)–(20)として、ここに、もう一度書きだす。

- (16) イギリス人が3人ビールを買った。
- (17) イギリス人がビールを2本買った。
- (18) ビールをイギリス人が2本買った。
- (19) ビールをイギリス人が3人買った。
- (20)\*イギリス人がビールを3人買った。

(16)、(17)の文は、それぞれ(13)、(14)として仮説Aの原則によって認められたものと全く同じものである。ということは、(16)、(17)に関しては、途中の段階で一つの規則も適用されず、表層のレベルの文(16)、(17)が基底レベルの表示(13)、(14)からそれぞれ派生されたと考えられる。<sup>49</sup>このように、仮説Aは、なぜ(16)、(17)が文法的な文となるのかを説明する。次に、(18)の文に移る。(18)の基底での表示には、許された基底表示(12)–(15)の中から、(14)を選び、さらに仮説Aの原則通りその簡単な構造と文法単位の名前を示すと、(14')となる。

(14') イギリス人が ビールを 2 本 買った  
 主語 (S)    目的語(O)    数量詞(Q)    動詞 (V)

この(14')に、仮説Aの規則1を適用する。規則1は、目的語の前方への移動を認めたもので(14'')が派生される。

(14'') ビールを イギリス人が t \* 2 本 買った  
           O                    S            O    Q            V

\*これは、目的語「ビールを」が移動した後の痕跡 (trace) で、表層の文としては見えない (invisible)。

(14'') は、(18)の文である。即ち、我々のモデルは、なぜ(18)の文が、日本語の文として文法的なのかを説明したことになる。<sup>(11)</sup>

(19)の文については、その基底レベルの表示として(13)を選ぶ。

(13') イギリス人が 3 人 ビールを 買った  
           S                    Q            O            V

これに規則1を適用すると(13'')が派生される。

(13'') ビールを イギリス人が 3 人 t 買った  
           O                    S            Q    O            V

(13'')は、実は、表層の文(19)と同じもので、(19)は、認められた基底の文(13)から派生されたことになる。よって仮説Aは、(19)の文を文法的であると判断する我々の言語直観を説明したことになる。最後に(20)の文についてだが、仮説Aの原則に合う基底表示(12)－(15)のどの一つを選んでも、仮説Aのモデルでは派生することができない。このことは、仮説Aが、なぜ、我々の言語直観が(20)の文を非文法的と判断するのかということに、原理的に説明を与えたことになる。<sup>(12)</sup>

ここで、このセクションをまとめる。文法的文は仮説Aで派生可能であり、

非文法的文は仮説Aで派生不可能であった。このように、派生が可能か不可能かということで、仮説Aは、我々の脳内に存在すると考えられる文法が判断する、文法的な文かそうでない文かの違いを、原理的に説明したことになる。このことは、この2.1で扱ったデータに関する限り、仮説Aは、脳内の文法に対するモデルとしては妥当なものであるということを示している。しかし、この仮説A、特にその日本語の語順に関する原則が、上記のデータを説明するだけだとしたら、それは、その場限りの説明を与えたにすぎない可能性もあり、脳内の文法に対するモデルとしての仮説としては、十分に支持されたとは言えない。そこで、次の2.2では、別の種類のデータでこの仮説の有効性を調べてみることにする。

## 2.2 再帰形「自分」との関係

ここでは、以下のデータを使って、仮説Aの妥当性を検証してみる。

(21) 太郎<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>のことを吹聴している。

(22)\*自分<sub>i</sub>が太郎<sub>i</sub>のことを吹聴している。

(23) 自分<sub>i</sub>のことを太郎<sub>i</sub>が吹聴している。

(24)\*太郎<sub>i</sub>のことを自分<sub>i</sub>が吹聴している。

(例文は、黒田(1980) pp. 28-29)

下付(subscript)の*i*は、指標(index)で、同じ指標のついているものは、同一の対象物(者)(referent)を表わす。ということは、(21)、(23)の「自分」は「太郎」を指示する意味の文として文法的な文であると日本語の話者が判断し、その反対に、(22)、(24)は、「自分」と「太郎」が同一人物であるという読みでは、非文法的な文であるという判断を示している。もちろん、後者の文でも、「自分」がこれらの文の発話者を指すという読みならば、文法的な文となる。しかし、それでは指標*i*が示し意図する読みではないので、その意味は排除される。

ここでは、一応、日本語の「自分」は、英語の -self 形と同種の、再帰形と



して議論を進める。

(25) John<sub>i</sub> boasts about himself<sub>i</sub>

(26)\*Himself<sub>i</sub> boasts about John<sub>i</sub>

英語の例文(25)、(26)で、明らかなように、再帰形(この場合はhimself)というのは、前方照応をその特徴とし、(26)のようにたとえ同一文の内部であっても、その後に来る要素(この場合はJohn)を指すことはできない。再帰形はそれの前方にあるものしか指せないという、この特徴は、英語に限ったものではなく、各言語に共通する普遍的特性と思われる。では、どうして(21)–(24)のデータのうち、(23)のみ日本語では、この普遍的特性に反して、再帰形「自分」がその後方に位置する「太郎」を指示することが可能なのであろうか。さらに、(24)では、再帰形「自分」が、なぜその前方に位置する「太郎」を指示することができないのであろうか。この問いに答えるために、仮説Aがどのようにこれらの現象を説明するか検証してみる。即ち、仮説Aが妥当なものであれば、(21)と(23)は、派生可能な文となるであろうし、(22)と(24)は、派生不可能になるはずである。

(21)の文は、仮説Aの式型に当てはめると、基底レベルでの表示は、(21')のとおりである。

(21') 太郎<sub>i</sub>が 自分のことを 吹聴している  
           S                  O                  V

このレベルで規則2が適用され「自分」の指すものは、前方の主語「太郎」であることが計算され、両者に同一の指標*i*が付与される。よって、(21')、即ち、(21)が派生される。

(21') 太郎<sub>i</sub>が 自分<sub>i</sub>のことを 吹聴している  
           S                  O                  V

(22)の基底レベルでの表示は、(22')になる。

(22') 自分が 太郎のことを 吹聴している  
           S                  O                  V

(22')では、仮説Aの規則2が適用不可能である。なぜなら、再帰形「自分」は、前方にある主語のみ、その先行詞として指示できることが基底のレベルで決定されるのだから、(22')では、「自分」と「太郎」が同じ指標を持つことはない。よって、「自分」と「太郎」に同一の指標が付与されている(22)は、非文法的な文となる。

(23)の基底レベルでの表示は、仮説Aの原則が示す式型に当てはめると、(23')であると考えられる。

(23') 太郎が 自分のことを 吹聴している  
           S                  O                  V

このレベルで規則2が適用され、「自分」と「太郎」に同一の指標が付与される。即ち、「自分」は、「太郎」を指示することが示される。それが(23'')である。

(23'') 太郎<sub>i</sub>が 自分<sub>i</sub>のことを 吹聴している  
           S                  O                  V

次に、規則1を適用し(23''')を得る。

(23''') 自分<sub>i</sub>のことを 太郎<sub>i</sub>が t 吹聴している  
           O                  S          O          V

(23''')は、即ち(23)のことで、(23)の文が、仮説Aに基づき派生可能なことが示された。さらに、(24)の文の基底レベルの表示は、(22')と全く同じものであると考えられる。

(24') 自分が 太郎のことを 吹聴している  
           S                  O                  V

(24')は、仮説Aの規則2の適用条件に合わず、「自分」と「太郎」が同じ指標を付与されることはない。(24')に規則1が適用され(24'')は派生されるが、それは、「自分」と「太郎」が同一指標を付されている(24)とは別物である。

(24'') 太郎のことを 自分が t 吹聴している  
                   O                  S      O                  V

よって、(24)がなぜ非文法的な文であるのか、仮説Aによって説明されたことになる。<sup>(13)</sup>

## 2.3 結 論

2.1 時点では、仮説Aが数量詞に関する興味深い現象(16)–(20)を説明するだけであって、仮説Aは、ひょっとしたら、(16)–(20)のデータを説明するだけの、なんら一般性を持たないその場限りの仮説である、という疑いが生じる。よって、その時点では、脳に内在する文法のモデルとしては、十分に支持されたことにはならない。しかし、2.2のデータは、2.1のデータとは全く独立の、再帰形「自分」の指示に関するものである。そのデータが、2.1と同じ仮説A、特に日本語の文の語順に関する原則によって、原理的に説明される。ということは、仮説Aは、日本語話者の脳内に存在する文法のモデルとして、あながち的はずれな仮説ではないということが結論づけられる。

上記のことを、科学方法論的に述べると次のようになる。ある自然界の現象の集合Aを説明する仮説Pが存在するとする。もし、この仮説Pが真にその現象Aを捉えた理論であるなら、Aと関連する、しかし、全く独立な他の現象B、C、D…に対しても、説明を与えることができるという予測が成り立つ。そこで、科学者は、Aの現象を説明したことで満足せず、さらにB、C、D…という現象の集合を探すことになる。これは、まさに、我々が2.1のデータだ

けで満足せず、2.2のデータまで説明を試みたのと同じ態度である。仮説Pは、Aの現象だけでなく、B、C、D…という現象を説明することができることが判明して、初めて、その仮説に対する支持が強固なものとなるのである。

### 3. おわりに

本論は、現代言語学の考え方のうち、仮説というものの性格を述べたものである。言語学における仮説は、我々の脳内に存在する、言語に関する計算システム＝文法の一部として提示される。さらに、その仮説を検証する方法は、他の経験科学と同じ方法を採用。本論で提示した仮説Aは、まず2.1で、日本語の数量詞とそれが修飾する名詞との関係を説明した。しかし、もし、それだけのための仮説だとしたら、一般性の低い仮説であり、脳に内在する文法のモデルとして十分に支持されたとは言えない。しかし、その同じ仮説が、2.2で、数量詞のデータとは独立な日本語の「自分」に関するデータをも説明する時、その仮説の妥当性は、十分に高いと言える。現代言語学の営みとは、脳内に実在すると思われる言語に関する計算システム＝文法を、上記の方法によって一つづつ仮説を積み重ねて、モデル化していく作業であると考えられる。一つづつ仮説を積み重ねて文法を構築するという言い方が読者に、帰納的方法論を想起させるかもしれないが、事実は逆である。言代言語学では、言語理論が十分に仮説の中味を制約しており、勝手気ままな仮説群が文法となるというような見取り図は描くことができない。本論では、言語理論の問題は立ち入らず、次回以降の論考で考察することとする。

ここで、2で扱った言語事実を、もう一度視点を変えて、考えてみる。2.1で扱った数量詞の問題も、2.2で扱った再帰形「自分」の問題も、本論では、仮説Aで説明された。仮説Aの原則というのは、文末の動詞を除いて日本語の語順は、一見、全く自由であると思われるが、実は、あるレベル、即ち基底のレベルでは、主語・目的語・動詞という順序で固定されているということである。そして、規則1は、そのうち目的語のみを前方へ移動することができる規定する。また、規則2は、「自分」の先行詞は、前方の主語であると規定する。ここでの分析は、左・右という語の順序や前方への移動というように、凡

て線形的(linear)に言語を捉えている。また、2.1で扱った言語事実も、2.2で扱った言語事実も、一言でその特徴を記せば、日本語における主語と目的語の非対称性である。即ち、日本語では、主語と目的語という2つの名詞句は、それぞれ、統語的に異ったふるまいを示すということである。本論では、このことを説明するため、仮説Aという線形的な分析を採用した。即ち、主語と目的語のふるまいの違いは、規則1で両者の前方への移動可能性の有無に帰着させられる。しかし、言語の普遍的特徴と思われる主語と目的語の非対称性を線形的に分析するだけでは、充分とは思えない。この非対称性は、構造的なものとして言語を捉えてみることにより、初めてうまく把握できるであろうし、この点に関する他言語との比較も、可能になると思われる。しかし、言語の構造については、本論の範囲を超えるもので、次回の論考で詳しく論じたい。

## 注

\*本稿は、1989年度、沖縄大学で私が担当した教養ゼミ「言語とは何か?」のために用意したものを基にしている。これを書くにあたって、ゼミに活発に参加した学生からの質問、反論が大いに役立ったことを、感謝を込めてここに記す。そもそも、このゼミの学生達が存在しなかったのなら、本稿もここに存在することはなかったのである。また、本研究の一部は、沖縄地域研究所からの援助を受けている。

(1)この理論的枠組みは、普通GB理論(統率・束縛理論)、または、原則とパラメーターのアプローチと呼ばれている。チョムスキー自身は、GB理論という名称は、誤解を生じやすく、最近の研究内容を正確に表現していないと述べている。(Chomsky 1987)

(2)例えば、磯崎新[編著]『建築のパフォーマンス』のチョムスキーに対する注に、「(チョムスキーは)普遍文法=深層構造を、個別文法=表層構造へと転換する変形規則を中心に言語能力や、言語運用の規則と体系化を生成変形文法として提示。」という箇所がある。この一文の中にあるいくつかの誤りの中で、最も一般的なのは「普遍文法=深層構造」という箇所であろう。普遍文法とは、自然言語を自然言語と成らしめている原則の集合と考えられ、深層構造とは、文法における一つの表示のレ

ベルに過ぎない。よって、両者は全く異なった概念である。

(3)MIT教授、ウェイン・オニールからの個人的な情報による。この計画が、現在のどの程度、実行に移されているのかは、不明。

(4)「装置」というタームは、あいまいな概念であるが、Aの仮説では、Bの仮説と同じデータの集合を説明するのに、Bより多くの規則や新たな原則を必要とするとしたら、当然、Aの方がより多くの装置を使っていることになる。

(5)実際には、話は、これ程単純ではない。無制限に仮説を作れる訳ではなく、それは、特定の言語理論に沿ったものでなくてはならない。例えば、チョムスキーの、原則とパラメーターのアプローチは、束縛理論、統率理論、コントロール理論、境界理論など、7つのサブ・システムからなる体系である。Chomsky(1982) 他を見よ。

(6)Chomsky(1988)を見よ。特にChapter 1。

(7)以下の(i)の文のように、動詞が文末に來ない文も、日本語として成り立つのではないかという疑問に対して、黒田(1980)は次のような議論をしている。

(i)太郎が花子にあげた——アंकレットを。

(i)の文は、かなり例外的に扱うべきで、なぜなら、(i)を埋め込み、復文とすると、その結果の(ii)は、非文法的文となる。

(ii)\*太郎が花子にあげた——アंकレットをことは、次郎を驚かせた。

それに対し、例えば(iii)の文を埋め込んだ(iii)は、全く問題ない。

(iii) アंकレットを太郎が花子にあげたことは、次郎を驚かせた。

このような例を挙げて、黒田は、動詞が文末に位置しない(i)のような文は、日本語の文としては、かなり特殊であり、語順の問題を考えると、考慮する必要がないと述べている。

(8)ここからの議論は、黒田(1980)を中心に、Saito(1985)、Whitman(1982)を参照した。但し、仮説Aの定式化、及び、分析の細部は、凡て著者独自のものである。

(9)この規則1における、主語と目的語の非対称性については、本論の3を見よ。さらにその根拠については、注12を見よ。

(10)「派生」という概念を、このコンテキストに即して述べると、以下のようになる。ある基底レベルの表示Aと、ある表層のレベル $\alpha$ の表示が一連の定められた操作=アル

ゴリズムによって関係づけられるとき、 $\alpha$ はAから「派生」されたと言う。

- (11)(14<sup>o</sup>)では、「ビールを」と「2本」がどのような手続きで意味的に結びつくのかという問題が未解決のまま残されている。これには、2つの考え方が可能である。第1に、(14<sup>o</sup>)の目的語がその痕跡とチェーンによって関係づけられ、その痕跡自体が「2本」に修飾されているという考え方である。もう一方の考え方は、(14<sup>o</sup>)のレベル、即ち、基底のレベルで「ビール」と「2本」が既に結びつけられているので、そのレベルで意味解釈済みであるという立場である。どちらの分析を採るかは、どのような言語理論に依拠するのかという問題に深くかかわっていて、ここでは、即断できない。
- (12)この分析では、前方移動できるのは、目的語だけであり、主語は、移動不可能であるという規則1の規定が重要な意味を持つ。なぜなら、もし、主語も移動することができるのなら、(20)の文は、(13)の基底レベルから、目的語の移動(規則1)、主語の移動という順に操作(operation)をくわえれば、派生することが可能になるからである。もし、規則1の、主語の移動は不可能であるとの条件が、(16)-(20)のデータを説明するだけのためにあるのであれば、これは根拠のとばしいその場限り(ad hoc)の規定であるという批判は、正当なものとなる。これは、経験的問題であり、規則1の一般性を高めるためには、今回のデータとは違った種類のデータに対しても、主語が動かないことを示さなくてはならない。今回の考察では、あまりに専門的議論になるので省略したが、この問題に興味を持つ読者は、Saito(1985)を見よ。
- (13)賢明な読者は、既に、規則2を『「自分」の先行詞は、表層のレベルにおいて「が」でマークされる主語である』と書き変えても(16)-(20)のデータに関しては、うまく説明できることに気づいていることだろう。この修正した規則2と、仮説Aの規則2のどちらを採るかという問題は、経験的であると同時に、理論的なものでもある。経験的には、この限られたデータだけでなく、より広い範囲のデータについて検証してみなくてはならない。理論的側面としては、修正された規則では、再帰形とその先行詞の決定が文法関係(この場合、先行詞が主語であるということ)に依拠していることである。このことは、普遍文法(UG)の性格づけとの関わりで重大な問題を孕むが、ここでは、深く立ち入らない。現在の言語理論によると、少なくとも英語の再帰形は、構造のみに依拠してその先行詞が決定され、文法関係や、左右の線形的順序関係に言及する必要は、全くない。言語の構造に関しては、次回の論考で詳しく述べるつもりだし、

特に、英語の再帰形に関しては、Chomsky (1981, 1982)などを参照して欲しい。  
また、日本語の「自分」に関しては、数ある文献の中からInoue (1976)を挙げておく。

## 参考文献

- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding, The Pisa Lectures*.  
Foris, Dordrecht.
- \_\_\_\_\_. (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government  
and Binding* The MIT Press, Cambridge.
- \_\_\_\_\_. (1986a) *Knowledge of Language, its Nature, Origin, and Use*. Preager,  
New York.
- \_\_\_\_\_. (1986 b) *Barriers* The MIT Press, Cambridge.
- \_\_\_\_\_. (1987) *Generative Grammar: Its Basis, Development and Prospects*.  
Kyoto University of Foreign Studies, Kyoto.
- \_\_\_\_\_. (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*,  
The MIT Press, Cambridge.
- Inoue, K. (1976) "Reflexivization: An Interpretive Approach," in *Syntax and  
Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. ed. by M. Shibatani, Aca-  
demic Press, New York.
- 磯崎新〔編著〕(1985)『建築のパフォーマンス』PARCO出版. 東京
- Kuno, S (1973) *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press, Cam-  
bridge.
- 黒田成幸(1980)文構造の比較.『日英語比較講座』第2巻. 大修館書店.
- Takezawa, K (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*,  
Doctoral Dissertation, University of Washington.
- Whitman, J. (1982) "Configurational Parameters," ms. Harverd University.